

2024年度

国語

最初に、以下の注意事項をよく読んでください。

1. 問題冊子は監督者の指示があるまでは開いてはいけません。
2. 監督者の指示にしたがって、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。問題冊子は受験番号のみを記入してください。
3. 試験問題の内容に関する質問には答えられません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。
4. 受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。
5. 問題冊子および解答用紙は持ち帰らないでください。
6. 漢字で書くべきところは漢字で書いてください。

受験 番号	
----------	--

*解答に字数制限がある場合は、句読点なども字数として数えます。

【一】 次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 料理をモリつける。
- ② ハイユウの演技を見る。
- ③ 入学シガン者が増える。
- ④ 飲食店のカンバン。
- ⑤ 困難をセイシン力で乗りこえる。
- ⑥ 経済セイサクについて話し合う。

問二 次の熟語と同じ成り立ちのものを一つ選び、記号で答えなさい。

「再会」

- ア、開店 イ、仮定 ウ、頭痛 エ、増加

問三 次の四つの漢字は、ある共通する部首をつけると別の漢字を作ることができる。その部首名をひらがなで答えなさい。

倉・貝・干・亥

問四 次の□に対になる漢字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

針□棒□

問五 次のことばは慣用句である。()に入る漢字の総画数を、漢数字で答えなさい。

背に()はかえられぬ

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学三年生の真歩は陸上部のキャプテンで、同学年の葉月、沙風、みらいとともにリレメン（リレメンメンバー）だった。ある大会の前、陸上部顧問の立花先生がリレメンから真歩を外して一年生の美羽留を入れると決定し、これに反発した葉月と沙風が翌日の部活動を無断欠席する。立花先生の指示で二人を探しに校外に出た真歩は、葉月がいそうなシヨップینگモールまでやってきた。

キョロキョロしながら歩いて、それらしい姿は見つからなかった。ドーナツ店やかわいい小物店にもいない。

金券シヨップ脇のエスカレーターに乗って二階フロアへ。いつそのこと、迷子の呼び出しでもしてやろうか。

二階にも中学生の姿はなかった。帰宅部の高校生がいるくらいだ。わたしだけ南沢中のジャージで 1 して目立ってるかも。本当に補導注1されたらどうしよう。百円シヨップや服屋さん。そしてフロアのいちばん奥にあるゲームセンターにも姿はない。もしやと思って、下着屋さんも覗いてみた。

あとは……まさかあの葉月が本屋さんに……でも一応行ってみた。雑誌コーナーや趣味の本。文庫本や漫画。X 児童書コーナーまで。

全部見たけど、どこにもいない。あとは……もうない。

Y 絶望的な気分におそわれた。葉月がいないという事実もだけど、陸上部はこのままどうなっちゃうんだろうかって。わたしがキャプテンになったばかりに、バラバラになっちゃった。

南沢中女子四百メートルリレー、棄権注2します。理由は仲間割れです。キャプテンが無能だからです。

もうキャプテンなんてやめてしまいたい。だいたいわたしに、人をまとめる力なんてない。なんで西野センパイは、わたしなんかをキャプテンにしたんだろう。頭の中が、落としたスイカみたいにくじやくじやだ。

「あんた、どこ中！」

「うわわあー」

いきなり呼ばれ、叫んで跳んじやった。

「きゃはは、驚きすぎいいー。今、二十センチはねたよ」

「西野キャプテン」

「キャプテンはおまえⅡだ」

「すみません。センパイ何してるんですか？」

「万引き」

「へっ？」

「嘘だよ。相変わらず反応悪いな」

「ほっといてください」

「ほっとけないよ。ほーっとして、蒸し暑さで脳みそが溶け出してるんじゃない」

「そんなことないですよおー」

① 近い状態ではあったけど。

「それより真歩、練習は？」

西野センパイの顔見て、せっかくハレた気分が、またふさいでしまった。

「えっ、どうしたの？」

「センパイ。陸部注3バラバラになっちゃったんです。もう泣きたい気分です」

「あっ、そう。でも、意味もなく泣いても、何もかわらないから」

「わかってます。けど」

「じゃあ、なんかおごってやるから、下行こうか」

西野センパイについてエスカレーターでおりた。センパイがたこ焼きを買ってくれて、テーブルに着く。今の陸上部の状態を説明する間、センパイは黙々と口を動かした。

「このたこ焼き、おいしいよね。たこがプリプリしてる」
話を聞き終わったセンパイの第一声。

「わたしの話聞いてました？」

「うん聞いた。おまえも食べるよ」

「こんなときに無理です。でもひとつだけ」

「食べてるじゃん。それにしても速いね」

「えっ、食べるの普通ですよ」

「ちがうよ。真歩ンとこの一年生」

「美羽留、すごいです。うまく育てれば、全国大会のファイナリストだって夢じゃないです。でもそのせいでリレメンが、バラになっちゃったんです」

「そのせいじゃないよ。おまえのせいだよ」

「そんな」

はつきり言われてまた落ちこむ。

「おまえの気持ちがふらふらしてるから、みんなが迷うんだよ。心の中にだって手のひらがあるんだよ。ちゃんとそこへバトンパスしなきゃ、伝わるものも伝わらない」

センパイは言っつて、たこ焼きをすすめてきた。② おいしいはずなのに味がしない。

「ねえ真歩。わたしさ、キャプテンしてるとき、ずっとこわかった。^{注5} 百もハードルも、いつも準決で負けて、そのうち沙風が決勝残ようになったじゃん。決勝にも残れないキャプテンって、どうよって。みんなからバカにされていなか内心心配だった」

センパイの目がどこか遠くを見る。苦しんでるセンパイの姿なんて見たことなかった。

「それでどうしたんですか」

「自分にとつての陸上ってなんなんだろうって考えた。そのとき思い出した。わたしがセンパイから言われた言葉。おまえの笑顔えがおいいって。試合前にその顔見ると落ち着けるって。そしたらもう、これしかないなって思ったんだ。もちろん決勝に残りたくて、最後まで必死でやった」

「だから、勝っても負けても笑顔だったんですね。わたしもセンパイの笑顔好きです。焼きいもみたいであつたかいです」

「いもかよ。せめてピザまんにしてよ。でもな、顔の表情は作れても、心の表情は作れないから。顔色とか顔つきとかいうけど、心色とか心つきとか言わないだろ。心の中はどんなに繕つくろってもわかっちゃう。特に真歩は正直だから」

「バカなだけです。センパイ聞いていいですか?」

「なんでも聞いて」

「どうしてわたしを、キャプテンなんかにしたんですか。いつも落ちこむんです。沙風みたいに、かつこよく走れたらいいのにとか、みらいみたいに、ちゃんと後輩こうはいをリードできたらいいのにとか。葉月みたいに大人の彼氏かれしがいたら、
Z
置かれ
るだろうとか。わたしなんて、説得力のかけらもないのに」

「真歩はさ、みんなの話を聞いてあげられる。そう思ったからキャプテンに指名した。でも誤算だったのは、自分の言葉を持つてないってとこ」

「立花先生にも言われました」

「真歩はどう思ってるの? このまま一年生に、リレメン譲ゆずっちゃっていいわけ? もちろんそれもアリだと思う。もしそうなら、はつきり自分の言葉で言うべきだよ。たとえ悔くやしくても、あきらめましたって。流れに任せるんじゃないってさ。それでも沙風や葉月が戻もどってこないんだったら、
注
つぐみや美玲使もちってメンバー組めばいいじゃん。どうなのおまえは?」

聞かれて黙だまった。

ここまできて、まだ自分で答えが出せない。三年生になれば自然に沙風たちとリレーを走れると思つてた。

センパイがすくつと立って、セルフサービスになつて水を持つてきてくれた。そしてまた席に着くと、黙だまってわたしを見た。

③ 自分のまわりの音が全部消えたような気がした。

ふと女子四百メートルリレー決勝のトラックが頭に浮かぶ。注8
スターティングブロックが見える。注9
スターターが台上がり、競
技場が静まりかえる。注10
スパイクピンがカチカチ音を鳴らす。そのとき、バトンを持ってそこに立っているのは……。

心の奥から言葉が生まれた。

「わたしは……わたしだっけで負けたくない！」

「じゃあその気持ちを言葉にして、態度で示せよ。それが見えないから、みんなバラバラになっちゃうんじゃないのかな」

センパイは簡単に言うけど、どうすればいいのかわからない。こんなことじゃ、永遠にみんなを引っぱることなんてできない。

一口水を飲む。④
悔しさで涙がこぼれそうになる。目の前のテーブルがにじんで見えた。

「誰に遠慮してんの？ 立花先生？」

そうかもしれない。

かといって、沙風や葉月みたいに真っ向からはむかうなんて、わたしには無理。

「立花先生、言ってなかった？」

「何をですか？」

「この決定に不満だったら、勝手にすればいいって」

「言っていました。センパイも言われたんですか？」

「うん。……ねえ、⑤
勝手にすればいいじゃん。真歩が思うようにやれば。こわいんじゃない？ 自分で決めるのが。いつも誰

かのせいにして、逃げ道用意して。人任せにして。それじゃキャプテンつとまらないし、誰もついてこなくて当然じゃん」

「そんな……」

「立花先生って、いい人だよ。選手が反抗したら大会に出さない先生もよそにはいるけど、そんなことしないし。むしろ待って

るかも」

「待ってる？」

「そつ。本当の意味で真歩たちがリレメンになれるのを。そのためにはまず、おまえが自分の言葉で話さなきゃ。先生に言われてとか、みらいに気をつかつてとかじゃなく。自分の言葉で話して、言ったことを必死になつてやれば、みんなついてくるつて。真歩ならできるつて。だからわたし、みんなの反対押しきつて、真歩をキャプテンにしたんだから」

センパイに手を握られ、がまんできなかつた。⑥ 涙があふれて、ぼたぼた落ちる。

「ハンカチくらい持つとけよ」

センパイが貸してくれた。持つてるけど、かばんのいちばん底でくしゃくしゃになつてるから、恥ずかしくて出せない。

「泣いとけ泣いとけ。でも知らない人が見たら、あの子きつと男に振られたと思われろぞ。まあ、わたしはいいけどさ。涙が止まったらちゃんとひとりずつ、会つて話しろよ」

わたしはうなずくしかなかつた。

西野センパイは泣き止むまで、2 待っていてくれた。

帰りますと立ちあがつたとき、ハンカチをどうしようか迷つた。

「センパイ、これ……」

「ちゃんと洗つて返せよ。常識だろ」

「じゃあ、今度家まで返しにいきます」

「こなくていい。競技場へもらいに行くから。七月二十四日、リレー決勝のあとでな」

そして別れぎわ、こう言つた。

「真歩、キャプテンつて、そんなに悪くないから」

そこにはあの西野キャプテンの笑顔があつた。

まずみらいと話をしよう。⑦ そのあと沙風や葉月とも。

(村上しいこ『ダッシュ!』〈講談社〉より)

注1・補導……青少年の問題行動を防ぐために、警察などが声をかけて指導や保護をすること。

注2・棄権……ここでは、大会出場の権利を捨てて使わないこと。

注3・陸部……「陸上部」を省略して言っている。

注4・ファイナリスト……スポーツなどで決勝戦に出場する選手。

注5・百・ハードル……百メートル走・ハードル走のこと。

注6・準決……準決勝のこと。

注7・つぐみや美玲……陸上部の二年生。

注8・スターティングブロック……陸上選手が走り出すときに、選手の足を支える器具。

注9・スターター……スタートの合図をする人。

注10・スパイクピン……シューズの底に付けられている、すべり止めのピン。

問一

1

2

に入ることはとして適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|--------|--------|---------|--------|
| 1 | ア、とぼとほ | イ、いそいそ | ウ、うろろうろ | エ、がちがち |
| 2 | ア、はたと | イ、じつと | ウ、ぐつと | エ、すつと |

問二

——線部X・Yの三字熟語と同じ成り立ちのものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものはいない。)

- | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| ア、新発売 | イ、映画化 | ウ、不器用 | エ、音楽室 | オ、市町村 |
|-------|-------|-------|-------|-------|

問三 〓線部 Z「〓 〓置かれる」が「敬意をはらわれ、認められる」という意味の慣用句になるように空らん〓二字で
答えなさい。

問四 〓線部 I・IIと同じ用法のものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

I「ながら」

ア、小学生ながらとても気がきく。

イ、昔ながらの風景が残る町なみだ。

ウ、そばにいなながら何も気づかなかつた。

エ、音楽を聞きながら部屋をかたづけた。

II「だ」

ア、コップにお茶を静かに注いだ。

イ、わたしの目標は県大会出場だ。

ウ、もう少しで手が届きそうだ。

エ、今日の波はとてもおだやかだ。

問五 〓線部 ①「近い状態」とあるが、これはどのような状態か。適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、陸上部の問題に気をとられていて、いつものような反応ができない状態。

2、どうすればよいかわからずぼんやりしていて、何の感情もわからない状態。

3、頭に浮かんださまざまな思いを整理できず、きちんと考えられない状態。

4、気持ちが高ぶっているため、小さな物事に対しておどろいてしまう状態。

問六

——線部②「おいしいはずなのに味がしない」とあるが、このときの真歩のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、自分が責められていることに納得なつとくいかないが、どのように反論したらよいのかわからなくて困っている。
- 2、自分でもキャプテンとして自信がなかったのに、さらに欠点をはっきり言われて気持ちがいずんでいる。
- 3、落ちこんでいるときに、陸上部で起きた問題を自分のせいにされたことが不満で投げやりになっている。
- 4、陸上部の問題を何とか解決しようと考えこんでいたため、ほかの物事を感じるよゆうがなくなっている。

問七

——線部③「自分のまわりの音が全部消えたような気がした」とあるが、このときの真歩のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、リレメンから外れたことに対する自分の正直な思いを知るため、集中して自分と向き合っている。
- 2、リレメンから外れたことに対する自分の気持ちがいまだに理解できず、落ち着かなくなっている。
- 3、西野センパイは自分の意見を聞いてくれそうだとわかって、不安がやわらいで冷静になっている。
- 4、西野センパイからの質問に対して何も言うことができず、きちんと答えようとしてあせっている。

問八

——線部④「悔しさに涙がこぼれそうになる」とあるが、どのようなことが悔しいのか。本文中のことばを用いて、三十五字以内で答えなさい。

問九

——線部⑤「勝手にすればいいじゃん」とあるが、西野センパイがこのように言うのはなぜか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、真歩が立花先生に遠慮しているとわかり、先生の言葉になら従うことができるはずだと思っているから。
- 2、立花先生の指示があつたにもかかわらず、自分で決めたり行動したりできない真歩にあきれているから。
- 3、立花先生の言葉は信頼しんらいできるので、真歩も先生を信じて言われた通りに行動してよいと思っっているから。
- 4、真歩がキャプテンとしての自覚をもって自分で決めることで、チームをまとめられると信じているから。

問十

——線部⑥「涙があふれて、ぼたぼた落ちる」とあるが、このときの真歩のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、西野センパイがキャプテンとしてのつらさや苦しさを理解してくれたので、味方がいると感じて安心している。
- 2、西野センパイにも立花先生にも期待されているとわかり、逃げ道はないと思っって気持ちを奮い立たせている。
- 3、西野センパイのはげましに心を動かされ、今までかかえてきた不安がやわらぎ前向きな気持ちがめばえている。
- 4、西野センパイの言葉でキャプテンとしての自信を取りもどし、なやまずに堂々とふるまおうと決意している。

問十一

——線部⑦「そのあと沙風や葉月とも」とあるが、あなたが真歩だったら、このあと沙風と葉月にどのように話をしますか。自由に書きなさい。

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

語彙^{注1}が増えれば世界が広がる

考えてみれば、私たちは「語彙を増やす」ということについて、明確な学習目標を立ててこなかった。語彙は、世界観を表すものでもある。個々人の思想や、社会の現状をどう見ているか、どういう社会を目指しているかによって変わってくる。それが増えるということは、その分だけ多くの視点や概念^{注2}を持てるということだ。

たとえばニーチェ^{注3}の語彙がわかれば、その思想も理解できるようになる。①世の中をニーチェのフィルターを通して見る事ができるようになるわけだ。

その語彙の一つに「ルサンチマン（恨^{うらみ}みの感情）」があるが、これは新聞や教科書にはなかなか出てこない。しかし、これをキーワードにして世の中を見ると、民族紛争^{かんそう}や戦争の歴史も、あるいは現状の社会も、また違った景色になる。そういう視点を持つことが重要なのである。

1、どうすれば語彙は増えるのか。基本は読書、できれば音読^{おんよみ}が望^{もち}しいが、昨今は若者を中心に読書自体が不足気味だ。そこで、まずは日本語の歴史を簡単に振り返りつつ、語彙の意義を問い直してみよう。

書くように話せますか？

作文の作法として、しばしば「話すように書け」というアドバイスを聞くことがある。まっさらな原稿用紙や、真っ白なパソコン画面に向かうと、書き慣れない人は最初から行き詰^づまってしまふ。そういう人でも気楽に書けるようにしようということだろう。たしかにブログやSNSに登場する日本語は、書き言葉のようでありながら、話し言葉に近い場合が多い。だから気楽に書け

るし、読み手にとってもそのほうがおもしろい。読みながらも、書き手の声をイメージできるからだ。

2、もつと中身のあるコミュニケーションをしようと思うなら、逆に「書くように話す」というスキルも必要だ。言い換えるなら、書き言葉と書き言葉を訓練することが、話し言葉の密度を上げることにつながる。

もともと話し言葉と書き言葉の関係性に関して、日本語には複雑な歴史がある。歴史的にも②両者の間に大きな溝があった。遠く平安時代から江戸時代にかけて、公式文書を男性が書く場合には漢文を使うという不自然とも言える伝統が受け継がれていた。だから江戸時代の思想家・頼山陽の作品などはすべて漢字で書かれていたりする。それも中国語そのものではなく、漢字だけで表現された日本語という、実に奇妙な形態だった。

この背景にあるのは、日本人の男性は漢字を使うのが正式であるというしきたりだ。漢文の訓練を積むことが、日本語の基礎力を高めることにつながっていたのである。たとえば江戸の末期に生まれた夏目漱石や森鷗外の世代は「素読世代」と呼ばれ、漢文のトレーニングを受けて日本語を書いていた。

だがこれでは、書く文章まで漢文調になってIとつつきにくい。そこで、もう少し柔らかな文章にしようという「言文一致運動」が起こり、その一環として登場したのが、三遊亭圓朝の落語を速記した文章だった。

たしかに落語は話し言葉であり、それを文字にすれば読みやすいし十分におもしろい。これが、その後の「言文一致運動」に与えたインパクトはきわめて大きかった。

その影響を受けた人物の一人が、漱石である。もともと落語が好きでよく聞いていたが、その柔らかな話し言葉を自らの作品にも取り入れた。たしかに、同時代を生きた幸田露伴や樋口一葉が書いたものに比べると、漱石の作品はずっと読みやすい。このあたりで、話し言葉と書き言葉の溝はようやく埋まってきたのである。

漢字を知らなければ豊かな表現もできない

とはいえ、両者の間にはまだ隔りがある。たとえば新聞記事を読むように話す人がいたとしたら、「この人の話し方はおか

しい」と思うはずだ。書き言葉には意味が詰まっている上、漢語も多い。頭の中で即座に漢字変換できない人にとっては、理解しにくくなるわけだ。

私はしばしば講演会などで、聴衆の方に「私の話を音声だけで聞いていますか、仮名だけで聞いていますか、それとも漢字仮名まじり文で聞いていますか」と尋ねることがある。そうすると、ほぼ全員が「漢字仮名まじり文」と答える。言葉というものは、音声だけでは認識できないのである。

たとえば、私が「きゃっかんできにひようかすることがじゅうようです」と話したとき、即座に「客観的」「評価」「重要」という漢字が頭に思い浮かばなければ、意味は通じない。^③これらの漢字を知らない小学生にとっては、理解不能なのである。

特に日本語の場合、同音異義語がきわめて多い。「こうぎをする」と言っても、大学の「講義」なのか「抗議」なのかは、前後の文脈から聞き取ることになる。その際も、それぞれの漢字を知っているから判断できるのである。

こういう素地^{注7}がなければ密度の高い会話は不可能であり、それには書き言葉の訓練が欠かせないのである。

逆に言えば、書き言葉の訓練をしていない人の話し言葉は、漢字変換がさほど必要ないということでもある。^④渋谷の街頭を歩く中高生の話し方を聞くと、もなしに聞いていると、たいていこの類だ。

⑤

もちろん日常的な雑談なら、しかもお互いに通じ合っているなら、それでも十分かもしれない。しかし、一定時間内にできるだけ多くの意味内容を共有し合えるようなコミュニケーションを目指すのであれば、あまりにも心もとない。お互いに書き言葉の能力を高めることが大【A】である。

ビジネスにおいて、すでに取引相手が待っているとか、会議の開始時間が迫っているといった状況^{注8}下で、ただちに重要な情報を伝達して共有する必要に迫られることがある。そういうとき、【B】を得ない話し方しかなければ、その場にいる資格がないと言われるのも仕方ない。こういう現場を難なくクリアしてこそ、一人前のビジネスパーソン^{注9}と言えるのである。

これはサッカーで言えば、基本中の基本であるパス回しのようなものだ。ボールを蹴ることなら誰でもできるが、試合で使えるレベルになるには相応の訓練が必要だ。

⑥ スペインリーグの名門FCバルセロナには、「ロンド」と呼ばれる練習方法がある。輪をつくってボールを回すのだが、その輪の中には、パスを邪魔するためだけに存在する「敵選手」も入る。それを避けながら、うまくパスを出していくわけだ。

この練習が、単なるパス練習よりずっと高度で実戦的であることは【C】に想像がつくだろう。FCバルセロナでは、これをトップチームはもちろん、下部組織である小学生のチームにも課している。世界屈指の強さを誇る理由の一端は、ここにある。

日本語についても同様だ。コミュニケーションは、いつも友人同士で気楽に雑談できるような場面ばかりとは限らない。むしろ社会人になれば、時間をはじめ、組織人としての責任、相手への気遣いなど、さまざまな制約条件が加わる。その中で、いかにうまく「パス」を出すかが求められるわけだ。

それには、書き言葉の訓練によって漢字や熟語の運用能力を高めるしかないのである。

語彙力の個人差は意外に大きい

では、話し言葉と書き言葉の最大の違いは何かと言えば、それは語彙である。誰でも当たり前前に共有していると思われるがちだが、それは違う。語彙の量、いわゆる語彙力は、個人差がきわめて大きいのである。

そのことは、たとえ同年代でも、日常的に新聞や専門誌を読んでいる人とそうでない人を比較してみれば明らかだ。前者は活字から得た語彙を自然に使えるが、後者はそういうインプットがない分、少ない語彙で賄おうとするため、どうしても子どもっぽい話し方になってしまうのである。

だが問題は、それを自覚しにくいことだ。これが英語なら、身のほどはわかりやすい。たとえば『速読英単語』（Z会）のような定番テキストの場合、「入門編」「必修編」「上級編」があつて、段階的に語彙が増えていく仕組みになっている。つまり、

使っているテキストによって、自分のマスターしている英単語が三〇〇〇語なのか五〇〇〇語なのか、あるいは八〇〇〇語を超えているのか、だいたいわかるわけだ。

ところが日本語の場合、自分がどれだけの語彙を持っているのか、数千語なのか一万語を超えているのか、答えられる人は少ないだろう。慣れ親しんだ母国語という気安さもあって、考えたことすらないかもしれない。これは、誰もが陥りやすい^⑦母国語の「落とし穴」である。

日本人が日本語を習得するプロセスを振り返ってみると、女子は小学三年生ぐらいで日常的に必要な用語をほぼ身につける。一方男子はやや遅いが、それでも小学六年生になればある程度話せるようになる。そのころの女子は、もう大人とほとんど変わらない。大学生ぐらいとなら、ふつうに会話が成り立つのである。

では、小学六年生をいきなりビジネスの現場に放り込んだとして、会話が成り立つかといえば、それは無理である。3、使われている語彙を理解できないからだ。

特定の経済理論や経営学やビジネスの仕組みがわからないのではなく、そこで飛び交っている言葉に馴染みがない。4、そもそも脳内で漢字に変換することも、考えることもできないのである。

(齋藤孝『日本語の技法 読む・書く・話す・聞く——4つの力』〈東洋経済新報社〉より)

注1・語彙……ある人が理解している単語の数。

注2・概念……物事についての大きな内容。

注3・ニーチェ……十九世紀のドイツの哲学者。

注4・スキル……訓練によって身につけられる技術。

注5・素読……意味や内容は考えないで、本の文字を声に出して読むこと。

注6・三遊亭圓朝……江戸時代の終わりから明治時代に活躍した落語家。

注7・素地……土台、下地。

注8・クリア……難しいことなどを乗りこえること。

注9・ビジネスパーソン……会社員。

注10・インプット……知識や情報を取り入れること。

注11・プロセス……物事を進める手順。

問一

1 4 に入ることはとして適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、だから イ、なぜなら ウ、すなわち エ、だが オ、では

問二

線部Ⅰ・Ⅱの本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「とつきにくい」

ア、活用しにくい イ、形式にとらわれている

ウ、親しみづらい エ、時間がかかりすぎる

Ⅱ「心もとない」

ア、未熟で下手である イ、非現実的である

ウ、予想外である エ、たよりなくて不安である

問三

【A】～【C】に入る二字のことは次の漢字を組み合わせてそれぞれ作りなさい。

領 態 容 提 結 要 前 易 失 論

問四 本文には次の一文がぬけている。どこに入れたらよいか、この直前にくる五字をぬき出しなさい。

多くの活字を読んできたり、あるいは多くの文章を書いてきた人は、原稿を朗読するように話すことができるのである。

問五 — 線部①「世の中をニーチエのフィルターを通して見ることができるようになる」とあるが、これはどういうことか。

その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、多種多様な語彙を身につけたうえで世の中を見ると、ニーチエの思想にもとづいた見方も可能になるということ。
- 2、ニーチエの語彙を視点にして世の中を見ると、ニーチエの思想にもとづいた発見や見方の変化があるということ。
- 3、思想や社会に関する語彙を学んでからニーチエの思想を学ぶと、世の中についての理解が深まるということ。
- 4、ニーチエの思想を理解すると、さまざまな視点で世の中を見ることの重要性に気づくようになるということ。

問六 — 線部②「両者の間に大きな溝があった」とあるが、この「溝」の内容の説明として適切なものを次の中から一つ選び、

番号で答えなさい。

- 1、漢文の訓練がされていたころの書き言葉が、くだけた言葉にまったく近づかなかったということ。
- 2、漢字だけを使った公式文書と、その他の文書の言葉や話し言葉がまったく違っていったということ。
- 3、漢字だけで日本語が表現された漢文調の書き言葉と、話し言葉がまったく違っていったということ。
- 4、正式なきまりがある書き言葉では、きまりがなく自由な話し言葉を表現できなかつたということ。

問七 — 線部③「これらの漢字を知らない小学生にとっては、理解不能なのである」とあるが、それはなぜか。その理由を説

明した次の文の（ ）にあてはまるように、「音声」ということばを用いて、三十五字以内で答えなさい。

日本人は人の話を聞くとときに、（ ）から。

問八 — 線部④「渋谷の街頭を歩く中高生の話し方を聞くともしに聞いていると、たいていこの類だ」とあるが、このよう

な話し方を、別のことばで表現した部分がある。これよりあとの文中から九字でぬき出しなさい。

問九

⑤ に入る小見出しとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、小学生のうちから語彙力を訓練する
- 2、語彙力の訓練で言葉のパス力を高める
- 3、書き言葉での日常的な雑談で語彙を増やす
- 4、語彙を増やして一人前のビジネスパーソンになる

問十 — 線部⑥「スペインリーグの名門FCバルセロナには、『ロンド』と呼ばれる練習方法がある」とあるが、筆者は何の

ためにこの話題を取り上げたのか。その内容の説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、制約や条件がある中でも内容が伝わるようにすることが大切だということを理解しやすくするため。
- 2、言葉をやまく使うためにはレベルの高い集団の中で実戦的な訓練をすべきであることを印象づけるため。
- 3、社会人になるとコミュニケーションに制約や条件が加わるはずだという筆者の主張を裏づけるため。
- 4、実際の場で活用できるコミュニケーションの取り方をどのように身につけるべきかを具体的に示すため。

問十一 — 線部⑦「母国語の『落とし穴』」とあるが、これはどのようなことか。本文中のことばを用いて、三十字以内で答えなさい。

問十二 筆者の考えと合っているものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、話すときに漢字や熟語を使えるようになるために、書き言葉を使って文章を書く訓練を積むようにするとよい。
- 2、社会人になるまでに、語彙を増やしておくことと、コミュニケーションの能力を高めておくことが必要である。
- 3、日常的な用語は子どもうちに自然に身につくので、あとは新聞や専門誌で専門的な用語を覚えていけばよい。
- 4、本や新聞などの書き言葉にふれて語彙を増やせば、多くの意味内容を共有し合う密度の高い会話が可能になる。

国語

解答用紙

受験番号

氏名

得点

国語2月3日

⑤	①
⑥	②
	③
	④

問一	
問二	
問三	
問四	針
	棒
	問五
	画

問一	1
	2
問二	X
	Y

問三	
問四	I
	II
問五	
問六	
問七	
問八	
問九	
問十	

問十一	

問一	1
	2
	3
	4
問二	I
	II
問三	A
	B
	C

問四	
問五	
問六	
問七	
問八	
問九	
問十	

問十一	
問十二	